

# 附属病院リワークデイケアプログラムと連携した

## 農業デイケアプログラムの実施

○大宮 秀昭<sup>a)</sup>、伊藤 睦<sup>a)</sup>、羽田 舞子<sup>b)</sup>、高山 千尋<sup>b)</sup>、関根 彩<sup>c)</sup>、加藤 盛夫<sup>d)</sup>

<sup>a)</sup> 筑波大学機能植物イノベーション研究センター技術室、<sup>b)</sup> 筑波大学附属病院、<sup>c)</sup> 筑波大学医学医療系、

<sup>d)</sup> 筑波大学生命環境系

### ・概要

筑波大学つくば機能植物イノベーション研究センター次世代農業研究部門（T-PIRC 農場）では、筑波大学附属病院と連携して、リワークデイケアプログラムに農作業を取り入れる「農業デイケアプログラム」を実施している。当プログラムでは、施設内で周年実施できる葉菜類の水耕栽培を基幹作業とするとともに、圃場において播種・定植から収穫までの一連の農作業を組み合わせて実施することにより、受講者の社会復帰率が高く、心のケアにも貢献している。

### 1. はじめに

うつ病患者を中心に復職支援を専門に行うリワークデイケアでは、実施施設・利用者数は年々増加する傾向にある。内容としては文化系や運動系のレクリエーションの他、作業系のプログラムが行われている。作業系プログラムでは、デスクワークが多く行われているが、デスクワーク自体が復帰への妨げの可能性もあり、仕事への抵抗感や疲労感、体力への不安などから、復職率および復職後の継続率が思うように改善できていないのが現状である。

このような現状から筑波大学附属病院精神神経科は、T-PIRC 農場と連携して、リワークデイケアのメンタルヘルス改善プログラムの一つに農業（農作業）を導入し、年間を通じて実施可能なプログラムを検討し、運営してきた。

### 2. プログラム内容

2013 年 5 月に附属病院担当医師から T-PIRC 農

場教員にリワークデイケアのプログラムとして農作業を取り入れることができないかとの相談があり、T-PIRC 農場ではプログラムの開発、運営、推進を担うメンバーを選出し、附属病院の運営条件を聞きながら、T-PIRC 農場で実施できる作業内容などについて数回の打合せを行った。打合せを通じて患者に対する理解も深まり、農作業実施上の安全性も確保できることが確認されたことから、『農業デイケアプログラム』は、2013 年 10 月から開始された。プログラムには作業療法士および看護師が 1～2 名必ず付き添い、週 2 回、1 回 2 時間程度、T-PIRC 農場技術職員が活動を指導してきた。また、山岳科学センター筑波実験林の協力も受けている。2013 年開始から 2025 年 1 月末日時点で 880 回実施し、延べ 5,781 名の患者が参加した(6.57 名/回)。

実施予定の策定は、実施月の前月に農場各部門に実施依頼を出し、提出された実施可能な内容および日時を基に、月ごとの実施プログラムを決定した。また、毎月 1 回、附属病院の医師、作業療法士および看護師を含めたスタッフミーティングを行い、実施内容や問題点、要望などの検討を行いながらプログラムの見直しや前月の振り返りを逐次行っている。

プログラム実施内容は、実施曜日、時間帯が予め決まっていることや、屋外作業は天候の影響によっては実施できないこともあることから、施設内で周年実施可能な葉菜類の水耕栽培を基幹作業とした。

一方、播種・定植から収穫までの一連の作業を体験することで、作物を育てる難しさと喜び、作り上げた達成感を得てもらう内容を構築できるように調整を行い、野菜関係ではナスの誘引から収穫まで、果樹関係では、ナシの人工授粉から収穫、キウイフ

ルーツの摘蕾から収穫までの作業を実施した。水稻関係では播種から刈取り、脱穀、粃摺りまでの作業を実施した。筑波実験林では、キノコの植菌から収穫までの作業を実施した。これら一連の作業に加えて、補完的で単発的な作業として圃場の除草作業、ブドウの袋掛け、収穫、ブルーベリーの施肥、収穫、クリ拾い、筑波実験林での生垣の刈込み、薪割りなど多様な作業内容を行った。また、開始当初から病院スタッフから、参加者が自ら作付けを計画し栽培を行う圃場区画がほしいとの要望が出されており、2015年度から患者の希望により無農薬または減農薬で栽培を行っている。生産した野菜は作業者が持ち帰って自分で生産したものを食べて成果を確認できるようにし、家族や友人に生産物を分け与えられるようにした。



—葉菜類の養液栽培(収穫作業)—



—水田での稲刈り作業—

### 3. プログラムの効果

附属病院にてインタビューの分析を行った結果、参加者への効果として、①自己肯定ができ、自己理解が深まった。②作業順番や組立てなどを考えるこ

とで、仕事への意識の変化が起こった。③自分で作物を育てることで、生きることへの実感が得られた。④上手いかない事に対して、折り合いをつけることが出来るようになったなどがあげられる。そして、技術職員が参加者に指導することで、習得技術の確認を行えるとともに、農業実習時に農作業に不慣れな学生に対する指導への反映が出来ると考慮される。また、栽培計画の関係で使用が難しかった空きスペースの有効活用が可能と考えられる。

### 4. プログラムの課題

技術職員の人員削減などにより、毎回指導することが難しくなりつつある。また、患者の参加人数によっては、予定を組んでも完遂できないことがある。そして、実施曜日および時間帯が予め決まっていることから、圃場作業(除草など)や収穫作業に課題がみられる。

### 謝辞

農業ダイケアプログラムの実施にあたり個別技術の指導をいただいた筑波大学 T-PIRC 農場技術職員の秋葉よしえ、伊藤百世、大坪大亮、斎藤明、直井弘典、松岡瑞樹、山本倫成、横山和人、吉田勝弘、柳橋諒の皆様、山岳研究センター筑波実験林の佐藤美穂、山田秀雄の両氏に深く感謝申し上げます。